

補論 3. 日本の先史時代における農耕

はじめに

現代の農耕あるいは農業における人間と植物との関係を民族植物学の手法で調査研究をしてきた。植物の栽培化過程を歴史的に明らかにするうえで、先史時代の前農耕について考える必要があり、日本の縄文から弥生時代の考古学に関心を持ち続けてきた。最近、縄文から弥生時代にかけての変遷に関わる考古学的植物遺残体の科学的分析方法が進展して、確からしい資料が急速に出されてきているので、植物学、考古学および民族学をつなぐために心強いことである。さらに、私が強い学問的影響を受けた先達中尾佐助や佐々木高明の農耕文化起源論（仮説）に、私の研究成果を加えて、僭越ながらこの補論で少しの加筆修正を試みたい。

Mithen, S. (1996) は狩猟採集民が最も統合された心の構造に達していたと述べており、日本列島では縄文中期から後期の人々がそれにあたり、心の構造と機能が生き物（動物）として最大限の発達を示していた（木俣 2021）と考えられる。後述する小林達夫や西田正規も大方賛同する見解であろう。縄文文化の伝統は消滅することなく日本の山村に伝統的知識体系として継承されてきた。と言って、単純に縄文文化を礼賛して、その時代に戻れなどと言っているのではない。ホモ・サピエンスの退行進化の現世を見るにつけて、優れた祖先である狩猟採集民の世界観である伝統的知識体系から多くを学び、将来の方向を生き物の文明へと方向修正することを強く伝えたいのである。

安孫子昭二（2015）は縄文時代の武蔵野の地形を次のように描いている。また、安孫子（2002）は縄文人の渡航技術を次のように高く評価している。文明の利器を使用せずとも、国境を見ることのない大陸の遊動民と同じように、縄文時代の人々の行動範囲はとても広がったのだろう。ユーラシア大陸をめぐっては、その海陸の移動も非常な広域に及び、また一度ではなく、長い時間に度重ねて多様な人々が往来したのだろう。

現在の東京湾岸の崖線は、後氷期（完新世）の気候の温暖化現象により次第に海面が上昇し、縄文前期中葉（約 6000 年前）までに波濤大地を侵食してきた浸食崖である。浸食された範囲の台地には縄文前期中頃よりも前の、旧石器時代や草創期、早期の遺跡が存在したが、海進により崩落したことになる。発掘される遺跡には何かしらの個性が認められるが、何れの遺跡も孤立していたわけではなく、他地域の縄文土器片や黒曜石製石鏃等が混じっている。内陸部は無論のこと、山地でも丘陵地でも尾根筋や峠越え、河川沿いのネットワークがある。山地域には狩猟を生業とするような山人が棲みつき、尾根筋および峠越えで奥秩父や甲斐、相模方面へと往来したようである。これらを介して得られた情報や文物が、都内各地の縄文遺跡にもたらされたのである。東京の縄文遺跡は全国でもっとも多様性があるといえる。

縄文時代は草創期、早期、前期、中期、後期、晩期の六期に大別される。最終氷期最寒冷期の 2 万年前には、海面が現在より 130m も低下していた。その温暖化現象が最もつのが早期末の 7000 年から 6000 年前の前期中葉で、現在の東京湾の海面よりも 3m ほど上昇した（縄文海進）。このため埼玉県の奥深くまで海水が侵入してハマグリやハイガイ等の食料資源を育んだから、海に面する台地縁辺には多くの貝塚が形成され漁撈も盛んとなった。中期になると人口が増加するとともに遺跡の分布密度が濃くなり、各地に環状集落が勃興するようになる。しかし、中期末 4300 年前になると環濠集落が縮小し解体するようになった。後期になると、居住環境は大地から低地を志向する傾向が見られるが、それが生業に関わる問題なのかどうかははっきりしない。この傾向は晩期に引

き継がれるが、どこの遺跡でも大量に石鏃を製作保有するようになる。西から侵攻する大陸側の弥生文化に対する備えとする説もあり、緊迫した情勢がうかがわれる。

硬玉産地の糸魚川河口から礼文島まではおよそ 1000km の道のり、同じく後期中葉の硬玉製品は日本海を逆に南下して、九州南端の種子島から 2000km 近く離れた沖縄本島まで到達している。礼文島船泊遺跡で出土した南海水域の特産品オオツタノハ・イモガイ・タカラガイ製品が沖縄本島から運ばれたとすると、3000km もの距離を航行したことである。この距離から見ると、対馬海峡を挟んだ北九州から朝鮮半島まではたかだか 200km に過ぎず、途中で風除け避難できる壱岐、対馬もあるから、指呼の間のようなものといえよう。

夏であれば当時の渡航技術の高さからそれほど難儀もなく日本海を渡り、庄内潟に入港できたことであろう。亡命集団は当時の縄文集団から温かく迎え入れられたものと考えたい。なお余談だが、亡命にあたって彼らは、移住先での食料生産のために、主食となる穀類や野菜等の栽培種子なども携えてきた可能性があると考えられる。

雑穀がいつ日本列島に伝播したのか。藤森栄一（1970）は早くから縄文中期栽培植物の起源について次のように論じており、まず摘要する。

栗帯文化論、伊沢幸平（1951）は中部高地一帯に、栗の繫茂帯があり、これが縄文中期文化と分布圏を一にしているとしている。深さの異なる 4 個の石皿は砥石などの諸説があるが、芋か雑穀の製粉処理用と考えるのが合理的である。澄田正一（1955、1956、1959、1962）は中期に多い石皿の多くが多孔質の輝石安山岩で、岐阜県地方でのヒエ栽培説を論じ、江坂輝弥（1967）は石皿による芋の澱粉製造を考えている。

縄文農耕は、弥生文化へ入っての水稻農業社会の在り方とは、著しく在り方を異にするもので、縄文晩期からはじまる水稻作りが、生活文化の基調となって、特殊に漁村や塩焼き村、あるいは陸耕集落、猟師やまたぎや、炭焼きなどの山村が分岐していくのとは、まったく基調を異にしているのであって、狩猟・漁撈、拾集の生活文化の中に、特殊な植物栽培民の生活があったと理解すべきである。栽培種としては米、イモなどの報告もあるが、正しく承認された例はない。栽培として考えられたものを列挙すれば次のようである。クリ、ヒエ、イモ、カタクリ、ユリ根などの栽培説も強力であるが、その実体の把握は絶望的である。今後、発掘によって栽培植物の遺体自身が出土するにしても、これは当然植物学の仕事であり、われわれは、考古学を通じ、中部高地の中期縄文文化の構造を究明すべきで、その文化構造こそ、単なる植物嗜食の強い採集狩猟民の文化とは、どうしても考えにくいという点にある。

先史時代の遺跡からのアワ、キビおよびヒエの遺残は分析方法や技術が進み、かなり同定の信頼度が高くなってきた。私は縄文時代には狩猟・採集などの生業に加えて前農耕から原初的農耕が行われていたと考えており、弥生時代以降に環濠集落が権力をもつようになって、戦争で生口をも集めて、農耕の強要が始まり、さらには古墳時代に向けて産業としての農業が始まったとの見解を持っている。この見解はスコット（2017）の『反穀物の人類史—国家誕生のディープヒストリー』を読んでさらに明瞭になった。日本でもすでに類似した見解を戸沢充則（1994）が的確にまとめて、指摘しており、弥生時代になって農耕社会の段階に入ったのであり、縄文農耕は原始農耕として捉えるべきであると、引用していた関連事項も次に摘要する。

縄文農耕が存在したと仮定しても、それが生業、生活のすべてを支えていたのではなく、採集・狩猟経済のまま、高い人口密度を維持していたのは原始農耕があったからであろう（佐々木高明）。

農耕の存在と農耕社会の存在は同義語ではない（西田正規）。原始農耕はいかに発達した段階でも産（農）業とは呼ばない（赤松啓介）。

小畑弘己（2016）によれば、メキシコで開催されたシンポジウム「農耕の起源—新たな資料・新たな考え」（2009）において、農耕に関連する用語の定義が次のように整理された。私はこの定義に賛同し、生業としての農耕と、産業としての農業を区別して論考を進めたい。

管理 management：野生種の操作とある程度の管理。栽培化や形態的变化はない。

栽培 cultivation：野生もしくは栽培化された植物の播種、植付のための土壌の意図的準備。

栽培化 domestication：植物（動物）の形態的・遺伝的变化。

農耕 farming：順化（馴化）された植物（動物）の利用。

農業（農耕？） agriculture：狩猟や採集は続いているが、ある共同体の活動を作物栽培や家畜飼育が支配したり、主要な食物となること。

{注：定義に関する訳において、馴化が使用されているが、一般には順化。また、農耕が2度使用されているが、後者は農業の誤植ではないのか。}

現在までに、明らかにされている考古学的研究成果によれば、本書の序章に記したとおり、おおよそ次のとおりである。ヒエの野生種は縄文時代早期から利用されており、日本の東北で栽培化された可能性がある（阪本 1988、木俣 2022）。中央アジア起源のアワは縄文時代晩期、キビはアワやヒエよりも遅く、縄文時代晩期後葉（中山 2012、中山・佐野 2012、中山・閏間 2012）、文献的には和名類聚抄（931-936）に記述がある。アフリカ起源のシコクビエはかなり古い時代だが不明のまま、モロコシは中国から朝鮮半島を経て中世5~8世紀、東南アジア起源のハトムギは薬用として享保年間（1716~1735）に栽培されるようになった。

そこで、未だ不明瞭な課題として、私が特に気になっているのは次の3点である。①サバンナ農耕文化基本複合の指標作物としてのシコクビエの伝播、②アワとイネの同伴する栽培、祭祀、言語などの事象。③稲作単一民族説を柳田国男はなぜ敗戦後になって提起したのか。

1) サバンナ農耕文化の伝播指標シコクビエ

日本の先史時代遺跡から検出されたシコクビエの事例はほとんどなく、弥生時代後期の横浜市道高速2号線 No.6 遺跡（笠原 1984c）からのシコクビエは走査型電子顕微鏡による観察であるので確かのような。この他に、発掘報告があるのは島根県頓原町（縄文晩期3000BP、プラントオパール、島根県埋蔵文化財センター1998）、香川県詫間町紫雲出山（弥生時代、種子、丹信 1964）などに過ぎない。時代が下って漸次、現代にいたっては、シコクビエはついに消滅寸前、アワはイネに圧倒されて、栽培者はごく少なく、これまた消滅的な遺存状態にある。中尾佐助（1967）はカリフ（サバンナ）農耕の発展段階を次のように説明しており、摘要するが、その前に少し異論を呈しておく。

中尾は、ムギ作のなかからは数知れぬ二次作物 secondary crop が生まれたが、ミレット農業のなかからは二次作物はまったく生まれてこず、この完全除草へと向かったミレット農業は必然的に大面積の畑をつくることを困難ならしめた、と記述しているが、私たちのインドにおける農耕地調査ではシコクビエやイネの栽培に応じた二次起源雑穀は何種もあ

ったので（木俣 2022）、この点は修正したい。これらはサマイ、インドビエ、コラリ、コルネ、ライシャンなどの一年生草本、および本来多年生草本であるコドラやハトムギのイネ随伴雑草、一年生化である。

インドではアフリカ起源のシコクビエも中国起源のイネも畑地のみでなく、天水田や水田で栽培されている。そこには湿生の雑草が随伴雑草として侵入している。したがって、南インドは、カリフ農耕文化とイネ栽培（農耕文化）が出会った場所であったと考えて、再考が必要である。中尾はカリフ農耕文化の影響で、雑穀の一種としてイネ栽培が始まったとして、イネ農耕文化を認めていない。しかし、最近の研究成果から、イネ栽培化の起源地や時期を参照すれば、むしろ中国の珠江や長江から、上流地域で近接するブラマブトラ河経由で、稲作がアッサムから南インドへと伝播したと考えられる。ちなみに、インドでは、今日でも祖先野生種の穀粒を採集して、祭事に神々に供するために高値で売られている。

また、中尾は、カリフ農耕の要素として日本に渡来した栽培植物には、その指標であるシコクビエが第一に考えられ、それに続いたものはヒエであろう、と述べている。しかし、今日まで、シコクビエの縄文遺跡からの遺残は容易に見つからない。また、ヒエは日本北方起源の可能性が濃厚になって来ている。アワ・キビがさらにその後続いたであろうことは、もしイネがさきに日本に渡来し、それ以後に畑作雑穀が渡来したとすれば、畑作農業コンプレックスの渡来という大事件がそろそろ有史時代にかかるころに起こったことになる。ところが、古文書に記録はないことを論拠として挙げているのみである。

第1段階：採集経済。第2段階：タマリンド・パルミラヤシなど果実類の利用が始まった時代、積極的に移植し、大規模な伝播がおこった。ミレットに関しては、サバンナに野生する多年生植物の種類（*Sorghum*, *Panicum*, *Setaria* その他）の採集利用あるいは一部分栽培化がおこったであろう。第3段階：一年生ミレットが栽培化された。同時にマメ類やウリ類の栽培化がおこり、農耕文化として一応完成されてきた。第4段階：サバンナ周辺の雨量の多い地域に伝播し、そこに野生する湿生ミレット類が農作物となり始める。すなわち、イネが栽培化された。第5段階：植物種子から油をしぼることを知り、油料作物が開発された。

サバンナ地帯でも、樹木のやや多いところでは焼畑農法が存在したらしい。輪作中にマメ類・油料作物などが入る点は、輪作体系としてみると、カリフ農耕の耕作法は発達段階は高いといえよう。特色の一つはひじょうに多くのばあい混播が行われており、それはウネによって作物の種類を変える混播法をとるインドの混播農業の原型をなすものといえよう。掘り棒と小形の手鋤がおもな土掘り道具である関係上、畑が条播にかたむく作付法をとるが、散播も存在する。おもにシコクビエ栽培の際に用いられる耕作法は草地にあらかじめ耕起や草焼きをほどこさず、いきなりシコクビエの種子をワラの隙間を通して巧みに散播する。シコクビエの発芽後、この畑をていねいに手で除草してやる。これはミレット栽培化の最も古い段階をいまに保存した農法と思われる。除草に対する欲求が条播栽培・クワの発達などと結合して、インドとシナのミレットを主体とした農業では、条播が標準農法となった。そこでは散播を原型とするムギ作も条播に変形して受け入れられてきた。ムギ作のなかからは数知れぬ二次作物 secondary crop が生まれたが、ミレット農業のなかからは二次作物はまったく生まれてこなかったのである。しかし、この完全除草へと向かったミレット農業は必然的に大面積の畑をつくることを困難ならしめた。反当り収量はムギの散播よりいち早く向上できたが、全収量の増大は除草努力だけでは向上困難な壁に早くうちあたってしまう。ミレットを主体とするカリフ農耕の生みうる余剰は反当り収量の増大にもかかわらず、全収量の壁のため早い時代に極限に達するわけで、古代のインドやシナの文明が開花したころに、その壁にほぼ到達して

しまったものと思われる。ここにカリフ農耕が古代に開花したにもかかわらず、その後の停滞をひきおこした真の原因があるのだろう。

シコクビエは西部アフリカ（ニゼル川センター地域）にいたる全アフリカ・インド・インドネシア・シナから日本におよぶ驚くべき広大な地域に栽培されるミレットで、binding indicatorとしての価値が高いものである。シコクビエの野生種は *E. indica* と推定されてきた (Stapf, Hooker, De Candolle)。シコクビエは4倍体 ($2n=36$) であるが、*E. indica* は2倍体 ($2n=18$) で、後者は日本からインド・アフリカまで野生分布する。そのカリオタイプ（核型）は両者よく似ている (Krishnaswamy 1951)。しかし、シコクビエのアフリカにおける分布と変異から Avdulov (1931) は、シコクビエはエチオピアで栽培化されたと推定した。最近発見された4倍体の野生種 *E. Africana* はアフリカ内陸高地にあり、その野生地付近の栽培種は自然交雑によって野生種の形質を受け入れており、現在とくにウガンダに変異が豊富である。この事実からみて、*E. Africana* は少なくとも栽培シコクビエの一つの親である (Kennedy-0' Byrm 1957)。また野生の *E. tocussa* がエチオピアでは採集され食用になっているという。シコクビエの起原はまだ十分確定したとはいえないが、エチオピア付近がひじょうに注目すべき地点の一つであることは疑いない。アフリカのスーダン一帯では、murwa およびその語系が広範囲に用いられている。インドにおいては、タミール語系の 'ragi' が標準名として農書に使われているが、それ以外の呼び方も多い。とくに kodo 系のごときは、ネパールからセイロンまでも使われるほど分布は広いが、これは別のミレットである *Paspalum scrobiculatum* が 'kodra'、'kodo'、となっていることと混線している。とくに意義の深いものは、ベンゴール語の marua で、低ヒマラヤのネパール・シッキムでもこの語はかなり通ずる。これは、スーダンの murwa と発音上ほとんど区別しえないものである。

ミレットの調理法の特徴の一つに、粒食の発達がある。粒食のためには精白がきわめて必要かつ有効な処理法である。カリフ農耕地域ではタテギネが普通、インドとシナでは今日それは影を消した。タテギネは戸外作業、乾燥地で適当。雨の多いインド平原部やシナで足踏みのカラウスが発達、雨降りでも屋内でできるから。インド以東ではミレットの粒食が多く、アフリカでは現在粉食が多い。再原始型製粉器といわれるサドル・カーンは、アフリカでは現在もかなり広く利用されている。アフリカのミレット耕作民がまずサドル・カーンを発明して、地中海沿岸のムギ耕作民に教えたのだろうか。

カリフ農耕の随伴雑草は少ない。インドのマメは他にみられる禾本の *Rottboelia* sp. は随伴雑草かも。ノゲイトウ *Celosia argentea* は日本では南半部の畑作物中に雑草として点々と存在し、淡紅の花が目だつが特別な用途はない。ノゲイトウとシコクビエの二つはアフリカから日本までを結びあわす指標として十分な資格をもつ植物の代表である。

照葉樹林文化はウビ農耕の一部であるから、もちろん焼畑の習慣があっただろう。照葉樹林農耕について日本に渡来したものは、カリフ農耕であろう。日本にそれぞれが渡来した時には、その途中で照葉樹林農耕のフィルターをうけて、かなり変質していたと考えられる。その変質の主要点は、山棲みの生活者となり、ミレットを焼畑で栽培するようになったことである。現在の台湾の高砂族はこの状態をあらわすひとつの典型と見なしうる。カリフ農耕の要素として日本に渡来した栽培植物には、その指標であるシコクビエがまず第一に考えられる。それに続いたものは、ヒエであろうアワ・キビがさらにその後につづいたであろう。もしイネがさきに日本に渡来し、それ以後に畑作ミレットが渡来したとすれば、畑作農業コンプレックスの渡来という大事件がそろそろ有史時代にかかるころに起こったことになる（古文書に記録はない）。また、カリフ農耕のミレットであるシコクビエは、今日の日本では山間部の最僻地にのみわずか残存するが、この開拓前線のもつ重要穀物は奈良朝のころにはすでに忘れられていたようである。

佐々木高明（1971）は中尾の照葉樹林文化論を敷衍する中で、シコクビエの栽培技術について次のように記しており、摘要する。佐々木の仮説では、常畑化した階段耕地において、シコクビエの移植栽培が成立した後、さらにその耕地が水田化されるという過程が進展した場合、以前に常畑で行われていたシコクビエの移植栽培技術が、そのまま水田に応用され、イネの移植栽培（田植）がそれに触発されて、始められたということである。南インドには2300～1800BC頃にシコクビエが栽培されていたようで、イネも若干は栽培されていたらしい。インダスには2300BCにはイネ栽培が伝播していたようだ（Fullerら 2001）。すなわち、南インドではシコクビエがイネよりもいっくら早く伝播していたということになる。今でも、ネパール、ブータン、北インドに限らず、南インドでは広大な面積でシコクビエが栽培されている。佐々木（1971）は南インドでは移植栽培はほとんど行われていないと記しているが、私は南インドの野外調査で、シコクビエの田植を観察した。確かに、直播も多いが、移植栽培もあり、苗床で引き抜いた苗はバナナの葉を割いて作った紐で束ね、男性が移植田に放り投げ、女性たちが、植え付けていた。日本でも移植栽培は各地で行われている。

佐々木は、イネはサバンナ起源の雑穀農耕文化が伝播して、広大な湿地に遭遇した際に、二次的に湿地性雑穀として栽培化されたと考えられる、としている。しかし、イネは中国の珠江の中流域で一次起源（Xuehui Huang et al. 2012）として4000～3500BC頃に栽培化されて、上流域に伝播し、近接するプラマプトラ河の上流域から、アッサム方向、さらにビーハール、オリッサへと南下、伝播したと考えられる（木俣 2022）。この過程でハトムギ、コドラ、サマイ、インドビエ、さらにコルネやコラティが湿生のイネ随伴雑草から二次起源雑穀として栽培化過程を進めたと考えられる。シコクビエとはこの過程の中で、オリッサから南インドで出会ったものと推測されるので、シコクビエの移植技術がイネに転移したかどうかはさらに検討が必要である。私はサバンナ農耕の影響以前に一次起源作物であるイネの栽培化過程は中国南部で始まっていたと考えるようになった。

稲作以前から以後への農耕技術の展開の仮説的展望として、もっとも特徴的な田植え技術の発生の問題を取り上げる。イネの移植栽培（田植）がいつ、どこで起源したかは全く解明されていない。田植え技術の発生は、焼畑から常畑へ、さらに水田へと農耕の形態が展開する過程の中で、シコクビエの移植栽培がもとになって生み出されたと考えてみる。シコクビエはイネと極めて密接な関係を持ち、広く移植栽培も行われており、シコクビエの移植栽培から田植の技術が発生したと仮設してみた。

多くの事例で見て、移植作業はすべて女性が行い、男性は耕起や砕土、苗配りしかしていない。日本の早乙女による田植えと同じである。シコクビエとイネは栽培期間も一致しており、その年の水条件でシコクビエかイネの栽培を決めている。イネはサバンナ起源の雑穀農耕文化が伝播して、広大な湿地に遭遇した際に、二次的に湿地性雑穀として栽培化されたと考えられるつまり、移植栽培の技術はシコクビエの栽培技術から取り入れたと考えられる。ムンダ族は焼畑を行い、シコクビエを栽培している。アパタニ族では早生と晩生のシコクビエを栽培し、穂刈で収穫している。ほとんどの栽培作業は女性が行っている。

松谷暁子（2001）は、先史時代の植物遺残を走査電子顕微鏡 SEM による微細構造の観察により、灰像と炭化像による先史時代の利用植物の探求を長年にわたって続け、膨大な資料を整理した。利用植物出土一覧を参照すると、北海道でも縄文前期にヒエ属、擦文期に

アワ、キビ、オオムギ、イネ、コムギ、ヒエが出土しており、本州でも縄文早期にエゴマ、同中期にダイズ、後期にオオムギ、晩期にイネ、オオムギ、ヒエ、九州では縄文晩期にアワ、リョクトウ、ゴボウが出土しているとの報告がある。四国からの事例はない。一方で、シコクビエの出土事例は上記した横浜市の弥生時代の遺跡からの出土が唯一記されているのみである。

後述の大野晋（2000）によれば、タミル語ではシコクビエは raghi、kelvaregu、その粥は ampali と呼称していた。現代のタミル・ナドゥでシコクビエの呼称は ragi, kapai、おねりは kali、かゆは kulu である (Kimata 2016)。中国語では糝子 cǎnzi、竜爪稗であるが、日本の地方名でもタミル語の raghi に対応するような呼称は見当たらない。

佐藤省三（1998、2001）は日本におけるシコクビエの呼称を広く調査して回った。60 余りの呼称を収集したが、標準的和名がなく、地方名の集まりとしている。標準的呼称ができる前に、各地に伝播したようだ。栽培・加工・調理法は共通性が高いのに、呼称は多様で連続性がない。ただし、四国稗の他に弘法稗、弘法黍、お大師稗など弘法大師に関連する呼称は広範囲に見られる。佐藤は、弘法大師の教えを信奉する僧、高野聖がシコクビエを広げたと推定する。呼称の著しい多様性から、日本列島の複数の場所に伝播があったようだが、最初に伝播したのは九州ではなく四国で、ここから各地に伝わったようだ、としている。

平野哲也（2019）は江戸時代のシコクビエの栽培について次の事例を紹介している。

下野国において、天保飢饉の最中あるいはそれ以後、雑穀に対する社会の評価と期待が高まってくる。大方の主穀・雑穀の大不作に直面した人々にとって稗と芋は何よりの拠り所となった。百姓はそれまで軽んじていた雑穀の強みを痛感し、その栽培に力を傾けた。天保 15 年（1844）の小貫村では、痩せ地でも、金肥ではなく自給肥料でもよく育ち、農作業の手間を省け、収量も多く、加工法次第で食味もよくなる弘法稗シコクビエの栽培を進めていた。

2) 弥生時代初期における南インドの影響

小山修三（1990）は日本語の成立について次のように整理しており、次に摘要する。

縄文時代には文字はなく、日本に初めて文字が現れたのは、福岡市志賀島の金印（1 世紀、中国製）、和歌山県隅田八幡宮の鏡など（5 世紀、日本製）である。言語学者の意見は混沌としており、琉球語、朝鮮語、アイヌ語、ツングース語、ギリヤーク後、チベット語、果てはインドのタミル語までが日本語の祖先、あるいは親類関係の言語としてあげられている。

川本崇雄のピジン・クレオールと日本語の形成の説は興味深い。彼は単語の音則を調べた結果、もともと縄文人はシベリア系の言語を使っており、そこにオセアニア系の言語が入って混合してピジンの言語ができた。縄文時代の終わるころにヘスペロネシア系の言語が入ってきて、ふたたびピジン化がおり、それが安定して現在の日本語の祖型となった。中国や朝鮮半島からの言語もとり入れてピジン化し原型をとどめないまでに変容し、現代の日本語になった。

大野晋（2000）はインドの共同研究者とともに、下記の論考の前に丹念なタミル古語と日本古語の比較言語学的研究を行っていた。彼は日本語とその文明は縄文時代を含めて、次の 4 段階を経て形成されたと考えている。1 オーストロネシア語段階、2 タミル語受け入れ段階、3 古代朝鮮語受け入れ段階、4 漢語の受け入れ段階。この堅実な研究作業を批判する人もあるが、信念を貫いた力作で、大いに共感する。対応する単語の中には、弥生時代

以後の水田稲作、金属使用、機織などの文明複合が多く対応語としてあり、海路北九州に伝播したと言う。

さらに、大野晋（2004）は、南インドの文明が3000年も前に日本に到達し、弥生時代を拓く原動力になったと述べている。これに伴って古代タミル語が古い日本語にかぶさり、単語と文法とが受け入れられ、日本語の原型となるクレオール語が成立した。文明の面で、古代タミル語と古代日本語とに多くの共通点がある。特に金属、穀物生産、機織り、神を中心とする祭祀、禁忌、罪過に関する単語である。その事実は言語構造としてタミル語と日本語の文法が類似、基礎的単語がいくつか対応するのみではなく、文明に関する単語が表す物事はタミルの巨石時代 Megalithic age, BC1000～AD300年という時代を代表する文明である。この巨石時代の文明的特徴は、製鉄技術、巨石墓、記号 graffitimark をつけられた土器、粟作と水田稲作、新年豊作祈願、物に寄り憑く神への信仰である。これらは弥生時代の九州に共通しており、タミル語古典 Sangam (BC200-AD200、2400首現存)によって対照できる。弥生時代に海路によって伝播したと考えている。たとえば、インド・パシフィックビーズは南インドから東南アジア各地、朝鮮半島や日本列島にまで及んだ。弥生時代の開始はAMS（加速器質量分析法）によってBC10世紀とされるようになった。サンガム Caṅkam には日本の農耕文化基本複合と共通する焼畑、アワ tinai やイネ nel の品種およびしとぎ citai、タミル語 cjtai など調理に関する叙述が多くある。

大野タミル語説は異説としてあまり受け入れられなかったようだが、タミル古語とアワやイネが縄文晩期から弥生早期にヘスペロネシア系言語の伝播に便乗して伝播したことはあったのだろうか。私が最も興味深いのは、アワとイネがタミル語説では古いタミル語彙と日本語彙とに共存する点である。北九州の菜畑遺跡ではアワとイネが共に栽培されており、新嘗祭でもアワとイネが共に供されているからである。

中尾の著述ではセイロン（スリランカ）にはシトギがあるが、インドにないと記されている。しかし、私は南インドのタミル・ナドゥでアワ、コドラやイネのシトギ mavu が今でも日常食材と祭事用としても見た。アワとイネ、インド起源雑穀はシトギと同じ湿式製粉法で粉食材にされている（木俣 1991、Kimata 2016）。スリランカはタミル・ナドゥと海峡を隔てて隣接しており、多くのタミル人が居住している。大野のタミル語説はさらに民族学的な関連研究を深める必要があるだろう。

中尾佐助と佐々木高明は『知の考古学』（1975）の対談「縄文的自然から弥生的自然へ」の中で、両者は次のように言っている。シトギに関する部分を摘要する。

（中尾）僕はシトギも毒抜き、渋抜きのタイプで照葉樹林文化に入れたいわけなんです。極端に言えば、ドンダリの料理法を穀類に応用したのがシトギだと。何もコメやアワはつぶさなくてもいい。それよりもセイロンなんか、米のシトギは日常になっている。（佐々木）水稻の生産力が上がる段階になり、この時点で山と森に適応し、雑穀と芋の焼畑に生業の基礎を置く照葉樹文化は自らの命を断っていくんだと思うのです。（中尾）その段階で弥生文化として日本にやってきた。（佐々木）照葉樹林文化が水田稲作文化によって消滅するという仮説を取れば、縄文時代にすでに照葉樹林文化が我が国に存在していたことになるわけですね。

（佐々木）柳田國男さんの海上の道についてですが、この仮説は稲を持った人たちが宝貝を求めて大陸から南島の島々に渡り、北上したということです。弥生文化は考古学的には南島では北から南に下りているので、稲作文化が北上したとはいかない。稲以外にアワとか芋を栽培する文化が南から北に伝わったとすれば、アワを中心としながら、芋がそれに加わったという農耕形態は、照葉樹林文化そのものです。縄文的な自然から弥生的自然への変化、本来の照葉樹林文化が消滅してゆ

くとともに、山と森への畏れと敬いが、われわれの心から失われていったことは事実のようです。心の変化が、現代の著しい自然破壊を生み出した重要な背景だといえるでしょうか。(中尾) それは人の運命でしょう。我々は何かを得れば、何かを失うのです。歴史は流転して、もとは戻らないのです。

3) 縄文農耕における栽培植物

小林達雄(1999)の縄文文化複合への視点は興味深い。次に何点かを摘要する。私は、生業としての農耕から、くに権力ができると同機して、多くの人々が集められ、強要される農耕からさらに租税としての農業(産業)が抜きんで、特段に生産性を高めたと考えるようになった。権力に強要されなければ稲作中心の農耕に向かわず、権力戦争がなければ生口(奴隷)は集められない。人間の生活様式の基盤は、野生、生業(家族、農耕を含む)、農業(ムラ、くに)、産業(王国、帝国)、情報(世界企業)へと歴史的に発達変遷してきた。野生を利用する前農耕(狩猟・採集、半栽培)や、生業の範囲内にある小規模家族農耕はさほど自然環境を傷めないで、自然環境を大きく開拓してきた農業と明確に区別すべきだ。くに権力の拡大のために人口増加を支える農業は歴史の推移であって、単純に自然破壊するから農業が悪いと全否定しているのではない。

また、縄文文化と弥生文化は時間の経過によって、次第に重なり合い、部分的には抵抗し、融合し、歴史を刻んでいったと考えたい。縄文時代後半の前農耕や生業としての農耕は、最近の発掘と科学技術の応用により、データの精度が高まってきたので、存在が確認できたといえる。小林の縄文と弥生の世界観の比較には共感するが、縄文の前農耕や生業から弥生の稲作や農業は歴史的には重なり合って変遷して行ったので、たとえ近年までにおいてさえも、縄文的要素が完全に消滅することはなかったと考えている。

縄文土器の主流は煮炊きのための土器であった。土器の発明によって彼らの食品リストに、大幅に植物性の食料が加わるようになった。植物を加熱することで、成分を変化させ、軟らかく食べやすくする。多くの動物種に加えて、多くの植物種を加工して食べるようになって、縄文人は生活が安定し、定住できるようになり、老人が体験的知識を蓄積できるようになった。彼らは動植物の生態的知識に精通し、自然と共存、飢餓から逃れることができるようになった。縄文時代中期に人口が増加し、後期に激減したのは寒冷化で食料不足になったというよりも、感染症によったのではないのか。

弥生時代になって稲作が始まると、稲作に生活時間の大半が奪われて、狩猟採集に手間をかけられなくなり、くにに強要されて収穫量をあげた。農民は稲作りに専念せざるをえなくなると、他の食料についての知識を忘れてしまう。すなわち弥生時代よりもずっと進んだ農業技術を持った江戸時代には何回も飢饉があった。縄文文化は、滅ぼされた文化なのである。滅ぼしたのは弥生文化を選択した祖先、縄文人の血筋を引いた縄文人自身なのだ。縄文人の道具は、第一に狩猟・漁撈・採集という生業用の道具があり、第二に使用目的が不明瞭な道具、土偶、石棒、石剣、石冠、御物石器があった。弥生文化の征服で、第二の道具は失われたが、しかし心の中には残っていた。後世の植物学・動物学は新しい情報を蓄積してきたであろうが、一方で貴重な縄文人の知識は忘れ去られているのである。

日本の中の文化要素の主要なものは大陸起源に違いないという先入観がある。主な技術や文化要素の発明は地球上のどこか一地点でなされ、そこから各地へ伝播拡散するものだという考えも大きな影響力をもっている。なお、日本の土器は煮炊き専用であるが、西アジアの土器は貯蔵用容器を主体としている。

農耕の進捗は多様な食料資源と縁切りさせ、農作物以外は雑草として排除すべきという考えを育てた。人工化した栽培種とその他多数の自然種を対決させ、自然を征服するという、自然との共生の終焉を意味した。縄文文化に対する高い評価は狩猟・漁撈・採集だけで到達し得るものではなく、原始的な農耕があったのではないかという仮説を生み出した。これら3生業を低く見る先入観に由来していることは確かである。縄文時代にも栽培種の存在があったかもしれないが、これを農耕と見なすのは誤りで、これらは採集の延長線上にあり、いくつかの栽培種があるからと言ってこれを農耕と評価するのは、弥生と縄文の本質の差をあいまいにし、歴史性への理解を妨げる。原初的な農耕の主要作物と予測されたヒエ、アワ、キビなどの雑穀類は依然未発見であり、それらはむしろ弥生時代以降コメに随伴到来した可能性が強まってきた。

上記の小林は、中尾佐助や佐々木高明らの照葉樹文化論には好意的ではない。私は国立民族学博物館での共同研究会に1980年以来、オブザーバーや共同研究員・報告者として同席し、その議論には直接参加してきた。小林が否定的に述べていた雑穀やイネは縄文時代の遺跡でも少ないながら、今日では確実な資料も出土し、縄文農耕はたとえ原初的な農耕との認知でも大方の合意を得るようになった。

中山誠二(2010)は植物栽培に関わる縄文時代から弥生時代中期初頭の大型植物遺存体の検出事例の中で、確実な植物同定、共伴遺物による時期の比定、放射性炭素年代測定やレプリカ法などによる確実な時期比定の三つの条件を備えるAランクの試料は少ない。この中で縄文時代に遡る事例は青森県富ノ沢(2)遺跡の中期のイヌビエ(野生種)、晩期末の長野県石行遺跡、石川県御経塚遺跡、三日市A遺跡のイネ、山梨県中道遺跡のオオムギ、滋賀県竜ヶ崎A遺跡のキビ(炭化種子、 $2550 \pm 25BP$)のみである。弥生時代前期後葉～中期初頭では山梨県石之坪遺跡のイネ、コムギ、オオムギ、アワ、キビ、ササゲ属アズキ亜属、神奈川県中屋敷遺跡のイネ、アワ、キビ、馬見塚遺跡、西志賀遺跡、高蔵遺跡のイネがある、などと記している。

那須浩郎(2014)は、北部九州で水田稲作が始まるのは弥生時代早期(2900BP)で、このころ近畿や関東、中部地方では、まだ水田が始まっておらず、縄文時代晩期中葉から終末になる。長野県伊那盆地では縄文晩期終末の遺跡でアワやキビの土器圧痕が見つかった。近畿地方では、京都府北白川追分町遺跡でイネとアワの種子が出土し、アワの年代が上記の竜ヶ崎遺跡とほぼ同じである(790～550年BC)。縄文時代のイネはプラントオパールや古DNAの分析結果から、陸稲に多い品種である熱帯ジャポニカで、陸稲栽培の根拠になっているが、水田で栽培することもあり得る。したがって、縄文時代晩期終末に受容した初期稲作は雑穀との複合農耕であるとしても、焼畑で栽培される陸稲を想定する必要はない。湿地でイネを、小高い畑でアワを栽培していたようだ、と述べている。

小畑弘己(2016)は、ササゲはアフリカ起源だが9世紀以降に、リョクトウはインド中北部起源だが14世紀以降に日本列島にもたらされたのであり、縄文時代の豆類は土器圧痕のレプリカ法による観察の成果から、ダイズとアズキおよびその野生種であると考えればよいと断言している。縄文時代とされてきた炭化穀物はAMS年代測定法により再測定した結果、ほとんどが後世や近世のものであることがわかり、コンタミネーションを排除すると、資料的信頼度が低下してしまった。土器圧痕種実炭化種実より表面形状を正確にとどめており、コンタミネーションがない。縄文時代の栽培植物は出現時期と起源地から大まかに3つに分類できる。①外来栽培植物(縄文時代前期以前):アサ、ヒョウタン、ゴボ

ウ、アブラナ科、シソ科（エゴマ）。②大陸系穀物（縄文時代後・晩期以降）：イネ、アワ、キビ、オオムギ、コムギ。③在来栽培植物：ヒエ、アズキ、ダイズ、と述べている。

私は現生の植物から栽培化過程を検証してきたので、歴史の原場を直接反映する考古学資料に期待を寄せてきたが、しかしながら、考古学資料は新たな発掘で発見が続き、見直しが多く、不安定である。小畑は、およそ1万年前にヒトと植物との間に交わされた共生契約によって、両者は今では地球上のほとんどの地域にその領域を拡大し、相互依存の関係を高め続けている。しかし、その契約ももう限界に来ているのではないだろうか、と記している。

私は小畑の直観に同意するが、さらに、共生契約は人間がすでに反故にしてしまい、今では栽培植物を戦略物資や遺伝子操作の化け物にして隷従させ、また人間自らをも自己家畜化して、生物として退行進化に向かいつつあると考えている。もし、生物的進化を断絶させたくないのなら、文化的進化の在り方を根底的な基層文化にまで下って、パラダイムシフト paradigm shift をせねばならないが、すでに定向進化には抗えない段階にあるとも考えられる。さらに、畠山剛（1997）は縄文人の末裔たちのヒエと木の実の生活史についてまとめている。畑跡が見つからなければ、農耕段階にあるとは認めないとの意見もあるが、数年で移動する焼畑農耕では、その跡地はしばらくして森林に戻り、斜面の表土は流出するので、畑跡地が何千年も残ることはとても難しいだろう。

4) 弥生時代における栽培植物

小田静夫（2017）によれば、柳田國男（1961）が想定した現日本人南方渡来説は約2,000年前頃の弥生時代の事で、考古学的方面からは琉球列島と本州島に南海産貝製腕輪の交易（貝の道）および弥生土器、青銅、ガラス製品、米（イネ）、ブタなどの搬入関係が知られていた。

近年の分子人類学の進展で、縄文時代人の祖先は東南アジアのスダランドから北上したホモ・サピエンスたちが、琉球列島や日本列島に移住拡散した南方起源（DNA分析）の人々であることが判明している（佐々木2003ab、篠田2007、溝口2011）。現在、確認される日本列島最古の人類遺跡は、約4万～3万5千年前頃の琉球列島と古本州島（九州・四国・本州）に発見される旧石器文化である。その石器群様相は礫器・磨石・不定形剥片石器に特徴があり、スダランドの旧石器文化と共通する石器群様相である。

約3万8千年～3万5千年前頃に、日本列島に旧石器時代人が渡来した。最初の集団は東南アジアのスダランドの旧石器人で黒潮を利用してフィリピン諸島、台湾東岸、琉球列島、九州南部や四国から太平洋沿岸に達した。次の集団は北部中国・シベリアから朝鮮半島を経由した旧石器人で、対馬海峡を渡り、九州北部から古本州島の日本海沿岸に達した。

縄文草創期（1万4千年前）頃には、長崎五島列島から沖縄本島にかけて桁ノ原型石斧文化圏が形成され、5千年前頃には琉球列島を経由して南九州地域に東南アジア、中国大陸沿岸部から、双刃石斧、稜付き石器を持った海洋航海民の北上が確認されている。弥生時代から平安並行時代（約2200～1000年前）になると、貝の道が展開された。台湾における最古の渡来民は大坵坑文化、粗縄文土器を持ち、狩猟、採集以外にタロ・ヤムイモ類、熱帯果樹、野菜、香辛料を栽培していた。

藤尾慎一郎（1993）は生業から見た縄文から弥生について詳論しており、次に興味深い点を摘要する。

西日本における縄文時代後・晩期から弥生時代前期にかけて、植物質食糧獲得手段がどのように変化するか検討した。この時期にみられる考古学的な変化は水稻栽培が始まるときにみられる変化ほど直接的でない。縄文時代の特定の生業に偏らない網羅的な食糧獲得システムと朝鮮畑作文化も網羅的な混合農耕であったのでうまく適合した。それに対して水稻栽培を中心に位置づける水稻農耕文化の伝播は組織的・集団的な人の移動を伴った大きな考古学的変化として捉えられた。縄文から弥生への転換は栽培を含む網羅的な生業体系から穀物栽培を中心とする選択的な生業体系への変化に特徴づけられる。

雑穀・穀物が対象の場合は、生業に占める栽培の比重が農耕かどうかの分かれ目になる。一般に日本の考古学者は遠賀川式土器が出土すれば栽培の対象が雑穀でもコメでも、また畑でも水田でも生業に占める位置づけとは関係なく農耕が存在したと考えるに、この土器以前になるとたとえ穀物が栽培されていてもそれを農耕と認める条件がぐっと厳しくなる。

縄文後・晩期以来、雑穀・穀物の段階、これらに陸稻が加わった段階を経験することで、草原種子型植物の栽培に関する知識を蓄積していった縄文人は、最初の内はこれらの植物栽培を採集や狩猟・漁撈より低く位置づけていたが（原初的農耕）、水稻栽培の高い生産性と渡来人の集団的・組織的な関与を受けて水稻を澱粉供給源の中心に位置づけ、列島は水稻栽培という特定の生業への傾斜を急速に強めていく。水稻農耕を基盤とする経済構造が確立すれば弥生時代とし、環濠集落が農耕経済構造の確立を示し、環濠は稲作の開始や生産地の拡大に伴う緊張状態に備えた防御的なものである。日本列島における弥生時代の開始は、夜臼Ⅰ式に求められる。玄界灘沿岸以外の地域が弥生時代の条件を満たす時期は遠賀川式土器の成立以降ということになる。

さらに、藤尾（2022）は伊勢湾沿岸地域における水田稲作民と採集・狩猟民に関する論考で次のように記している。

九州北部で水田稲作が始まると考古学では弥生時代が始まる。しかしながらその後、約700年を経て、関東南部地方では水田稲作が始まる。すなわち、水田稲作を始めていない地域では縄文文化が継続しており、弥生時代と縄文時代が併存していることになる。伊勢湾沿岸地域は縄文晩期に日本列島を東西に二分する、西の突帯文土器分布圏と東の亀ヶ岡式土器分布圏が接する地域であり、突帯文土器分布圏のもっとも東に位置する。外来系水田稲作民がこの地域で本格的に水田稲作を始めるのは6世紀BC後半からであり、この地域の採集・狩猟民はアワやキビなどの穀物を補助的な食料として栽培していたと考えられる。両者は稲作適地の低地と畑作適地の大地に住み分けていたと考えられる。

『日本古代史と遺跡の謎・総解説』（1998）において、水野祐は、弥生時代は新しい文化の伝播・発展によって平和な時代と概観されているが、実は、文献上から見ても、考古学上から見ても、血腥い闘争の時代であった。西日本の弥生人骨の中に、頭部や胸部に鏃のささった人骨が多く発見される。弥生時代の無名戦士の遺体であって、特にその先進文化地帯では戦争の時代であった、と指摘している。また、松尾光は、佐賀県の吉野ヶ里遺跡の環濠集落は弥生中期に最盛であったが、奈良県の唐戸・鍵遺跡をしのぐ弥生期最大の環濠集落であった、と言う。

弥生時代は藤尾が言うように組織的・集団的な人の移動があり、稲作を中心とする選択的生業に変化した。防御的な環濠集落は集団間の争いを推測させる。伊勢湾沿岸地域では水田稲作民と狩猟採集民との住み分け、あるいは争いが生じていたようだ。この時期には、戦死したと見られる人骨や縄文遺跡から鏃が多く出土し、縄文人が弥生人に抵抗していたと推測される。

5) 先史時代の文化の源流

研究手法として、松谷暁子（2001）のように植物遺残を同定するという課題を長期にわたって、地道に探求して実験データを積み重ねることにはとても敬意をもつ。また、中尾佐助（1967）のように多大な野外調査における直接観察の経験の蓄積により、直観的に統合的俯瞰的な仮説を構築することにも、憧憬を抱いてきた。軽佻浮薄に、一時の流行を追い、輸入翻案し、何度も煎じては薄まっていく研究は独創性がなく、すぐに消費される商品のようなもので、実に詰まらない。しかしながら、中尾佐助や柳田国男のように優れた文筆により構築された仮説は影響力が強く、いくら本人が仮説だと強調していても、あるいは定説のように表現したらなおさらのこと、なかなかその呪縛はきつく、弟子と称する人たちや後輩研究者は新たな資料に拠り検証、加筆修正することが難しい。

私は、日本考古学は農耕や稲作の開始時期の厳密な一線こだわりすぎていると常々思ってきた。植物の栽培化過程は植物と人間の関りの共進化にあり、同時並行的な長い時間がかかることを少しも配慮していない。先史時代の人間の行動範囲は広く、度重ねて日本列島に出入りしたと考えるのだが、数度や数か所の伝播だけで解釈したいようだ。日本民俗学も似たようなもので、政治的な官僚であった柳田國男が敗戦後に主張した稲作単一民族説にいつまでも呪縛されており、なにはともあれ、水田稲作こそが農耕だと思い込んでいる。前農耕、原初農耕、農耕、農業などと歴史経過を分類しても、実際に長い歴史を経た現在でさえ、狩猟や採集は継承されているし、進化生物学的に言えば、今でも植物の栽培化過程は続いている。植物の側から見れば、人間に片利共生や寄生され、単に利用されているわけではない。植物もある意味では人間の文化的進化を利用して、共進化しているといえよう。

西田正規（1989）は生態人類学的な視界から縄文文化を、徹底した現地主義、現場主義に立ちたいという願いをもって、人類史への関心を共有したいと、次のように素描しており、次に摘要する。

編年学的に遺物を整理することは考古学研究の重要な出発点であるだけに、ちがいと細部への強い執着があり、おなじ部分への注意や全体への関心が影に置かれやすい。編年研究と歴史を再構成することは先史時代研究の両輪であるが、互いの顔を逆に向けており、方法論的あるいは論理的な矛盾というよりも、個々の研究者が、あるいは長い歴史をもつ日本の考古学が、興味や視点を軽やかに変化させることに困難を覚えることも、作用している。

縄文社会の集落が10家族以下のサイズでとどまり、大きくないのは、周辺に資源がないからではなく、意図して小さいままでいたと考えられる。縄文文化は世界的に見てもごく早い時期に定住的な社会を出現させた。定住化という人類史的現象は温帯森林環境の拡大という大規模な自然現象に触発されて生じたように思われる。定住生活によって人類は初めて、人の影響を強く受けて変化した植生に囲まれて生活することになる。集落周辺には陽性植物、パイオニア植物などが成長する。集落には大量の資源が持ち込まれ、多量の廃棄物や排泄物が周囲に蓄積され、リンやチッソ成分に富んだ人里に特有の土壌が形成される。クリなどに見られるように、人類は定住することによって人里植物を生み出し、採集民から栽培民への過程を踏み出した。

6500年間、集落の規模は大きくならず、生業の技術水準が飛躍的に高度になることもなく、変化の少ない安定した社会が持続した。縄文時代の社会では社会的不平等を顕在化させることを回避し、縄文文化は文明とは異なる世界である。呪術や儀礼に関わる第二の道具のみは次第に増加し、個々に活力を注ぎ込んだ。

弥生文化への移行はきわめて急速であった。縄文晩期に九州にコメ情報が持ち込まれ、晩期後半には水田や水田農耕の道具、織物を出土する遺跡が近畿以西の各地に増え、弥生文化の拡散が始まった。弥生時代の社会は人工的な生産手段への依存を深め、より大きな集落を生み、大規模な墳墓を作るなど、社会規模が拡大するとともに、階層化への傾向が顕著となる。弥生時代初期の集落には環濠を巡らせたものがあり、集落内部や集落間における競争的な社会関係が予想される。

わずか1万年の人類史は、それまでの人類史とは異質とも思える速度で道具を改良し、食料を生産し、人口を増大させ、巨大な社会を出現させた。縄文文化はこの1万年の人類史の出発点にある文化である。

佐藤洋一郎（2016）は縄文農耕論の今について次のように記している。特に農耕という用語法についての見解には合意する。関連する部分を次に摘要する。

農耕というものの捉え方のあいまいさである。日本では農耕というと水田での稲作がイメージされることがいまだに多く、農耕を水田稲作とほぼ同義に考える考え方から抜け出していない。農耕のなりわいは作物の栽培を伴うために、種子をまいてから収穫までの間土地に定着する必要がある。農耕だけに完全に依存する社会はなく、採集と農耕の境界は曖昧模糊となる。縄文時代の社会が主に採集と、漁撈を含む狩猟で成り立っていたことは確かである。多くの考古学者が本音のところで思っているのは、縄文時代後半には農耕の要素があったと考えて何も不自然なことはない、という事であろう。

研究という知的作業の最後には全世界におけるなりわいや人間の営みを全体的に捉えた一種の世界像を描き出す作業である。この作業は研究者という一個の人格の、文字通り一生をかけて行われる終わりなき作業である。学術の世界はこの昇華の作業を忘れかけているのではないかと懸念する。

小畑弘己（2016）は、ダイズやアズキの植物遺存体が縄文土器の中から見つかり、マメ類の栽培化過程が推測できるようになったので、次のように記している。

植物遺存体は可食部分がほとんどであり、ウリやブドウの種子は捨てることにより遺跡土中に残るものの、（動物の）骨に比べれば腐りやすい。穀類やマメ類は種子そのものが食されるので、残る機会はきわめて少ない。根菜類は眼前に登場する機会をほとんど与えられない。

炭素・窒素同位体比による食性分析では、主たる生業を背景としたローカルな食の違いが見出されている。植物遺存体を探し出す方法としてフローテーション法が主に用いられてきた。土器に着いた圧痕を、シリコーンゴムを流し込むレプリカ法によると、圧痕としての出現率は縄文時代の早い頃には、マメ類とエゴマ、晩期末からはアワなどの穀類が主体を占めるようになる。縄文土器の中から圧痕としてダイズやアズキの種子が、時代経過によって大型化していることがわかってきた。

縄文時代早期末から前期には中部高地や西関東地方でダイズやアズキの栽培が始まった可能性があり、同じころ北陸ではエゴマの栽培が始まったようである。焼畑が栽培法の有力候補である。縄文人たちの食文化や生業・生活形態以外にも彼らの自然界に対する世界観についても、新たな部分が垣間見えてきた。栽培植物を軸とした生命再生のメカニズムの認知と、それらを制御しようとする意志の存在の可否である。

瀬川拓郎（2017）は縄文の思想として興味深い視点を記しているが、私も合意する点が大いにある。次にそうした点を摘要する。縄文とアイヌの関りに関する記述が多くあるので、この部分は補論4において後述する。彼が書いているとおり、日本の山村の農耕は、

たとえ農具や農業資材などは現代的でも、内容的に見れば基本的には縄文時代とさほど変わらず、厳しい条件での混合農耕である。複雑な傾斜地形、標高差、変動する微気象において、多くの作目、品種を重ねて栽培しなければ、総生産量は確保できない。傾斜地畑には農業機械を導入できず、耕せるのは3反や5反ほど、不足する食材は数町の山林から林産物の採集で補足してきた。これが旧石器時代から縄文中期の遺跡が所在する関東山地の山村における敗戦後の家族を養ってきた事例である（山村農人降矢静夫関連文集成）。

縄文は2000年前に消え去った過去ではなく、日本列島の周縁で、あるいは異なる相貌を見せながら私たちの深層でたしかに息づいてきた。周縁の人々の生活誌に注目すると、そこには明らかに共通する生き方や気風が認められる。それは商品交換への強い違和感、贈与への執着、分配を通じた平等、強制や圧力の拒否、他者や土地とのゆるやかなつながり、中心性を排した合意形成である。その縄文の声にしたがうことは、戦列を退いて敗者になることではなく、それは生の成熟とは本来かかわりのないことであり、どのような人間であれ、みじめで屈辱的な思いを抱え、身を小さくして生きて行かなくてはならない理由などひとつもありません。

農耕は主たるなりわいというわけではなく、生業のマルチカルチャー性という縄文伝統の中で理解すべきものである。縄文の選択は、農耕民と交流しつつ排他する、矛盾をはらんだ微妙な関係を生きることにはかならなかった。

近年の縄文人の核ゲノムの解読によれば、かれらはアフリカ、ヨーロッパ、東ユーラシアの人々のいずれにも属さない、孤立的な遺伝的特徴をみせている。そのため縄文人は、北東アジア人と東南アジア人の共通の祖先が旧石器時代にユーラシア東端の日本列島で孤立し、独自の進化を遂げてきた、現生人類のなかでも古層の集団と考えられている。

藤原清貴編（2018）の『歴史 REAL 日本人の起源』では、日本列島に順次到達した旧石器人、縄文人および弥生人の系譜や関係について、この10年ほどに明らかにされたDNA解析の成果を踏まえて、紹介しており、次に摘要する。

（篠田謙一）ホモ・サピエンスは20万年ほど前にアフリカで誕生し、6万年ほど前にアフリカを出て、中近東でネアンデルタール人と交雑した。ホモ・サピエンスが東南アジアから東アジアに北上し、日本列島に到達したのはおよそ4万年前と考えられる。旧石器時代の人骨は極めて少なく、本州と北海道では2万年前より古い時代の人骨は出土していない。沖縄本島南部の港川遺跡では4体の旧石器時代の人骨が出土している。ミトコンドリアDNAのハプログループから見ると、全国の縄文人骨から、恐らく縄文時代以前に日本列島に入ったと考えられるM7aとN9bがほぼ日本列島に限局して検出される。ちなみに、古人骨のゲノム解析が可能になったのは2010年以降である。

北海道のアイヌの人々は、縄文人の子孫というわけではなく、オホーツク文化人の遺伝的影響を強く受けていることが判明した。北海道の縄文人のハプログループは現在の大陸北東部の先住民との結びつきを強く示している。したがって、琉球列島と北海道を本土日本の周辺集団と捉えていた二重構造モデルが想定する南からの移住者という仮定は適当ではない。東南アジアから初期拡散によって北上した集団のなかで大陸の沿岸地域に居住した人たちが、縄文人の母体となったと考えられる。

現代日本人に伝わる縄文人のDNAは主に西日本の縄文人に由来している。一般には縄文人は関東以北の東日本を中心とした文化であり、縄文時代を通じて多くの人口を抱えていたのは東日本以北の地域だったと考えられているが、現代につながる縄文のDNAは西日本のものが多くなる。

弥生時代は稲作の開始によって定義されているので、全国が同時期に縄文時代から弥生時代に移行したわけではない。弥生時代が日本列島の基層集団である縄文人の社会に、大陸由来の集団が流

入する時代であったことを考えると、この時代が日本列島において最も遺伝的に多様な集団が分散して居住していたことになる。弥生の中期以降にも大陸から多くの人々の渡来を想定しないと、現代日本人の遺伝的な特徴を説明できない。

日本列島の人口の増減は、縄文早期（6100BC頃）に約2万人、縄文前期（3200BC頃）に約10万人、縄文中期（2300BC頃）に約26万人、縄文後期（1300BC頃）に約16万人、弥生早期（900BC頃）に約7万6千人、弥生終末期（AD200頃）に約60万人であったと推計されている。

（山田康弘）世界最古（約18000BP）の土器は中国湖南省の玉蟾岩洞窟から出土しており、日本最古（約16000BP）の土器は青森県大平山元I遺跡の無文土器である。縄文土器は日本列島で誕生した可能性が極めて高い。世界各地では定住生活の開始と農耕の開始・発達が結びつけて考えられることが多いが、日本では農耕の始まりと連動しているとは考えられない。気候が温暖化し、環境が変化していく中で、自然の中に多くの食料が発見・開発され、それらが小規模な定住集落の周辺で入手可能となったからであろう。

（藤尾慎一郎）福岡県の板付遺跡では最も新しい縄文土器にともなう水田跡が見つかったので、紀元前5～4世紀頃の縄文時代最終末に水田稲作が始まっていたことになる。しかし、弥生時代は水田稲作が主要な定義なので、板付遺跡は弥生時代であり、出土した縄文土器は弥生土器であることになった。さらに、その後、年代測定法が改善されて、日本の水田稲作は紀元前1000年頃に始まったということになった。紀元前11世紀頃に始まっていた水田稲作は、青銅器文化人がもたらした。彼らは格差のある農耕社会に生きていた。彼らが定着するのは水田を拓くのに適した場所である平野の下流域。網羅的生業を営む採集狩猟民（縄文人）と競合する場所ではなかった。また、縄文人は選択的生業構造である水田稲作を250～400年もなかなか受容しなかった。

その後、紀元前9世紀後半になると、環濠集落、戦死傷者、副葬品を持つ有力者の墓が見られるようになった。弥生文化は水田稲作文化と言うことになり、水田稲作を行う人々の文化はすべて弥生文化と言う認識が強まった。紀元前2世紀になると、木製の鋤や鍬などの刃先にはめて開墾や農作業に威力を発揮する鉄製鍬・鋤先が登場し、農業生産の増大に影響した。人口が集中した弥生遺跡からはありとあらゆる不用品のゴミ、寄生虫など環境汚染が起こっていた。戦いで傷ついた人骨も九州北部で多い。3世紀になると3階層、大人（支配者）、下戸（一般人）、生口（戦争奴隷）ができていた。

篠田謙一（2022）は、古人骨の核ゲノム解析に基づいて縄文弥生移行期の日本列島集団、特に弥生人の実体について次のようにまとめている。

数10体の縄文人、弥生人、古墳時代人のゲノムデータの結果から、弥生時代には列島内部に遺伝的に多様な集団が存在していた。縄文人は現代のアジア集団とは大きく離れているが、これは縄文人の祖先集団が他のアジアの集団と非常に古い時代、恐らく東アジアにホモ・サピエンスが進出して間もない時期に分かれたためであると解釈されている。この結果は、本土日本人がアジア大陸の北東集団と縄文人の双方の遺伝的要素を持っていることを示しており、この2集団の混血により成立したと言う二重構造モデルを支持している。渡来系の弥生人で最も古い事例は愛知県の朝日遺跡出土の弥生時代前期2600年前の人骨である。この地域には同時代に縄文系の集団が定住していた。農耕民が進出した地域では、最初はあまり混血せずに地域に定着し、後に周辺の狩猟民のもつ遺伝子の頻度が上昇することがわかっている。少なくとも、弥生時代初期の西北九州の弥生人は縄文人の直接の末裔で、南九州弥生人は縄文人の直接の子孫だった。

斎藤成也（2022）は、2012年になって、何万カ所と言う膨大な SNP（一塩基多型）データを使った解析により、アイヌ人とオキナワ人のクラスターが 100%のブートストラップ確率を示した（Japanese Archipelago Human Population Genetics Consortium 2012）、と述べている。また、ヤマト人がアイヌ人・オキナワ人のグループとさらにクラスターを形成し、100%のブートストラップ確率を示している。さらに、韓国人がこれら日本列島 3 集団のグループと再び 100%のブートストラップ確率でクラスターしている。ベルツ（1911）が提唱したアイヌ・琉球同系説が改めて支持されたということのようだ。関連して、篠田（2019）や溝口（2020）も日本人の祖先をアフリカから日本まで DNA から見て論考している。

6) 稲作単一民族説の呪縛

これまで検討してきたことから明らかなように、柳田國男（1931）の稲作単一民族説が、日本の民俗学や考古学を今でも呪縛しており、稲を主題としてしか民俗事象を論じず、稲作の開始が弥生時代だと、先史時代から現代にいたるまでの歴史理解に不公正な論理が働いている。彼らには人間との関係における植物の栽培化過程が長い時間と多様な生態があることにほとんど関心がない。地球環境の変遷の中で植物が進化し続け、その最近の第四紀は 258 万年前に始まり、以来、約 200 万年に人類が出現し、さらにホモ・サピエンスが現れたのは約 10 万年前、植物との共生進化の関係史を深めるようになった。野生動物の人間が野生に生き、約 5 万年前にいくぶん意識的に知識を蓄積・継承する前農耕ともいえるべき段階を経て、第四氷河期が終わった約 13000 年前頃に、肥沃な三日月地帯でムギ類の採集からオオムギの栽培化過程に入り、農耕文化を築き始めた。日本列島でも旧石器時代から縄文時代に移行した頃である。次第に温暖になって森林が拡大し、狩猟・採集・漁撈が容易になり、縄文中期頃に中部・関東地方で縄文人の人口が最大（全列島で約 26 万人）となった。その後、野生植物の採集と集落近くでの移植栽培（前農耕）、さらには栽培化過程にある作物の利用（原初的農耕）へと展開し、後期・晩期には山間地（縄文遺跡が多い）での焼畑農耕が始まり、平地（弥生遺跡が多い）での水田稲作を抵抗しながらも受容する弥生時代に至ったと考えられる。

坪井洋文（1979）は日本民俗学の限界を指摘しながら、縄文農耕を次のように肯定的に論証しており、次に摘要する。

日本民俗学は口頭伝承を資料として日本文化の研究をおこない、その特質の解明を目的とする学問であり、特に柳田によって日本人の心意現象、民間信仰の解明を核心にすえてきた。常民の生活知識を主対象とするが、その生活知識は稲作農耕を基盤にした、伝承文化の一元論の仮定を視点としていた。初期の研究はむしろ多元論であり、山民を先住民族の末と位置づけ、稲をたずさえてこの島に移住してきた異種族である天孫族と対立する民群であった。山民は住んでいた前住民であり、天孫族に逐われて山地に入ったとしている。

柳田は 1935 年頃から山民の文化と稲作民の文化を対置する視点を取らずに、稲作民の文化を軸とした日本文化研究、日本人研究へと視点を設定した。雑穀、豆、芋などが稲と次元を異にする等価値の栽培植物であり、生活文化と深いかわりを持つものであれば、科学的な検討がなされるべきだ。稲作とかかわらない民俗現象は、調査や分析の枠内に入らなかったり、排除されることになり、そのことが同時に柳田民俗学の限界のひとつともされた。日本の学界や教育会は、日本人の歴史は狩猟、採集を生活手段とした縄文文化をへて、農耕生活中心の弥生時代へと進むが、弥生時代の特色は稲作であるとの常識により、畑作農耕文化先行説に対して無視する傾向が強い。

谷川健一（2014）は柳田民俗学存疑として稲作一元論の批判を書いている。興味深い点を次に摘要する。

米に劣らず粟も儀式に重視されていたことは、『常陸国風土記』に新粟の初嘗、『日本書紀』の少彦名命が粟茎にのぼって弾かれて熊野の御崎から常世の国に渡り、『古事記』では少彦名命は酒を司る常世の神になった。大嘗祭では稲だけではなく粟も初穂で神酒と御飯をこしらえ、天子は神と共食した、などからわかる。

柳田國男は自伝の『故郷七十年』の中で、彼（11才）が尋常小学校に通っていた明治18年に、兵庫県加西郡北条町で、飢饉の光景を目撃し、その時の強烈な印象から、飢饉を絶滅しなければならぬという気持ちが自分を農政学や民族学に駆り立てたと述懐している。大学時代も義倉や社倉、常平倉という飢民救済のための三倉の研究に没頭している。ところが、柳田は昭和6年、7年、9年の数年にわたる東北大飢饉について一言半句も触れていない。私は柳田が昭和の東北大飢饉について発言しなかったことが納得できないでいる。何故に農民は貧なりや、という疑問から出発した彼の民俗学研究は、東北農民の惨状に何ら相わたるものがなかったのだろうか。東北出身の若い将校や兵士たちがこのような状況に憤激したことが、昭和11年の2.26事件の引き金だったと伝えられている。経世済民の志を生涯捨てなかった柳田が、表現者として東北大飢饉を素通りしていることが、私には何とも合点がゆかぬ。私はいたく失望するのである。柳田の筆を失速させたのにはもうひとつの理由があった。それは南方熊楠の批判、山人というのは平地人が何らかの事情で山に入り込み、世間と交渉を断って暮らしている程度のものであって、先住民の末裔とか原始人類とか言うような仰々しいものではない、これに柳田は反論しきれなかった。昭和10年（61才）は日本民俗学にとって大きな転回期であった。この年から柳田は民俗学の体系化と民俗学研究者の組織化を積極的に進めはじめた。昭和10年代以降、日本民俗学の精神は初心を失って墮落しはじめたと私は思う。柳田の民俗学の業績の中で、稲作を中心とした研究に力点が置かれるのは、主として昭和に入ってからである。

佐々木高明（2001）は、縄文文化と日本人に関して記述する中で、山民文化の伝統を縄文文化伝統の再評価として論じている。しかしながら、その前提として、日本民俗学や考古学の縄文文化軽視について異論を記している。

晩年の柳田國男は日本民族文化の起源と日本への稲作農耕の伝来は離れがたいものとして結びつけていた。確かに弥生時代初期あるいは縄文時代晩期に北九州へ伝来してきた水田稲作農耕は、その当初からきわめてすぐれた技術的装備をもち、安定した高い生産力と整った社会組織や宗教的観念を有するものだったと考えられる。日本の考古学者の多くは、弥生時代に先行する縄文時代を生産力が低く、生活の不安定な狩猟・採集の時代と断定し、農耕が成立し、安定した社会が出現するのはすべて弥生時代以後のことだと考えてきた。こうした常識が日本文化を何の疑いもなく、稲作文化と規定し、日本文化の特色やその形成を論ずる場合、稲作文化と言う単一の文化のみを問題にし、それが伝来した弥生時代にのみ視点を限る傾向が、広く日本の学界に定着してきたのである。

非稲作的な山民文化の伝統は、稲作文化が日本に到来する以前の時期、つまり縄文時代にまで遡って、その来歴を考えねばならない。照葉樹林焼畑農耕文化は、アワやヒエ・ソバなどの雑穀類を中心に、サトイモ、ヤマノイモなどのイモ類を加えた焼畑を生業の主軸にした農耕文化の類型のことである。縄文文化は基本的には東日本の落葉広葉樹林帯（ナラ林帯）に適応した文化であり、西日本は常にマージナルな地帯であった。『風土記』の注釈者たちは粟というのはアワを意味すると解釈しながら、新嘗と結びつく場合に限って粟をアワとせず、脱穀していない稲穀と解釈する。アワ

などの雑穀を対象とする新嘗の儀式は存在しないという考えがあったに違いない。701年に制定された大宝令をみても、イネとアワの値段は等価であり、当時はイネの代わりにアワを租税として納入することが広く認められていた。

伝統的な雑穀栽培型の焼畑を、神宮が禁止するほど大規模に営む山民であり、林野を多角的に利用する生活様式をもつ人たちがいたという事実が存するように思われる。辺境の山間地域において長く保持されてきた山民文化の伝統が壊滅する過程に決定的な影響を与えたのは、近世初頭に見られた幕藩体制側によってかけられた山村地域の大討伐であったと考えられる。熊野（北山）一揆や椎葉騒動、本山一揆、祖谷山征伐などが、その代表例の一部である。山民文化のもつエネルギーの大きさと強靭さを改めて評価しなければならない。縄文文化の系譜をたどることのできるこの非稲作的な生業に基礎をおく山民の文化は、稲作文化とともに、日本文化の特質を構成する二つの文化類型の一つとして今日においてもなお大きな意義を有するものなのである。

佐々木高明（2003）は海上の道の意義を考えて整理する中で、柳田の稲作単一民族説を論考しているので、その部分を次に摘要する。柳田が何故敗戦後に稲作単一民族説を主張したかに関して、その背景を少しでも解明したいからである。敗戦後に稲作単一民族説を出すに至ったことに、晩節を汚すような隠された意図、政治的な疑義がある。敗戦後、彼は枢密院顧問官になり、日本国憲法の制定に関与している。当人が直接語っていないからには、私は推測し、勘ぐるしかないが、象徴天皇制に関して天皇家への配慮をしたのではないのか。さらに深読みするなら、山縣有朋の長州陸軍閥に引き立てを受けていた柳田は天皇家への尊崇よりも、敗戦後の長州陸軍閥（靖国神社）が引き続き天皇家を利用し続けられるように、政治的な意図を隠して日本民俗学をゆがめたのではないのか。柳田は生涯を通じてとても優れた能吏であった。

『海上の道』（柳田 1953）の主張を要約する。最初の移住が漂流・漂着であり、宝貝の魅力にひかれて中国大陸から南島の島々へ移住してきた日本人の祖先は稲をたずさえてやってきた。その後、稲の栽培適地を求めて南島の島々を北上して日本本土に達した。海の彼方にニライカナイと呼ぶ浄土の存在を考える海洋民的な来世観を有し、稲魂の再生を祈る信仰とその祭りを有する人々であった。これらの人々こそ大昔に海の旅をした我々の祖先であった。柳田自身も仮定説と称しているように、十分に完成されないまま出版された未完の書である。

昭和 25 年の時点を境に、柳田を日本民族＝稲作の起源の研究に急抛向かわせた原因は他にもあった。昭和 24 年（1949）に行われたシンポジウム「日本民族＝文化の源流と日本国家の形成」において、江上波夫の所説、日本国家の起源を北方からの騎馬民族の征服と関連に対して、柳田は強い反発を感じたようである。

柳田は農政官僚として椎葉や遠野に出かけたころはまだ若くてそれなりの理想はあったのだろう。しかし、実際には優れた民俗学者というのは一面に過ぎず、本来は有能な高級官僚であったと、私は考える。彼は、大正 3 年貴族院書記官長、大正天皇の大嘗祭を取り仕切り、敗戦後の昭和 21 年に枢密院顧問官で日本国憲法審議に立ち会う。こうした政府の仕事をこなしながら、片手間に行った民俗学者としての業績による高い評価を得られるほどに、格段に優秀であったのだろう。

小熊英二（1995）は単一民族神話の起源に関して、とてもよく集大成している。柳田国男についても論評しているので、次に摘要する。

朝鮮で3・1独立運動のあった1919年のクリスマスを前に、日韓併合時の功績で叙勲もされていた、ひとり的高级官僚柳田国男(44才)が職を辞した。彼は当時の帝国の論壇の大勢とは逆に、混合民族論から単一民族論に転向した珍しい論者であり、単一民族神話の性格を理解するうえで重要なケース・スタディとなりうる。1900年に農商務省に入省、その後、司法・軍・学会などに縁戚をもつ柳田家の婿養子になる。内閣法制局参事官の12年の間に、宮内省書記官として天皇家側近、貴族院書記官長と、高級官僚として出世した。

『遠野物語』が発行されたのは、彼が官僚として日韓併合に立ち会っていた1910年であった。彼は自分が朝鮮にどう関係したかはいっさい沈黙している。その後、柳田は山人やなどについて語るのをやめて、マジョリティの平地民、南島論に集中していく。彼の山人論が征服者のエリート官僚が描く天孫民族の栄光の歴史観でもあった。推測でいえば、具体的な政策現場にいたリアリストの彼は、民族起源論で現代の政策を左右した気になっている者たちが混合民族論を大合唱することに、うんざりしていたのではないだろうか。南島論への転換をもたらしたのが、1921年の沖縄旅行であったことは疑いない。山人の存在を実証できなかったことも、山人の存在を認めなかった南方熊楠との交流や、天皇家との関係も無視できまい。そして戦後の彼は天皇家はもと大陸の一大名が渡来したものであって、倭はユナイテッド・キングダムだと形容する江上波夫の騎馬民族渡來說に、死に至るまで反論した。柳田によれば、日本は異民族のかわりに、日本民族の仲間を奴隷化したのだ。生産を担いつつ奪われる常民は、輸入文化に享楽する都市の利口者たちに虐使される、現代の奴隷である。柳田が凡百の日本主義者とちがっていたのは、日本の貧富の現実を直視したことだった。

柳田によれば、日本民族は北方の大陸ではなく、沖縄諸島を通過してやってきたのであり、それゆえ沖縄は言語も信仰も太古の日本を保存していた。南方渡來說の論拠は、日本民族の文化の中核は稲で、それは南方の作物だということだった。稲作が健在なかぎり、列島共通の民俗を掲げられる。そのためには、稲を伴わない日本人があってはならず、稲作が輸入文化であってはならなかった。日本民族は、この列島の侵入者であってはならず、稲をたずさえて南島から渡来し土着した民族でなければならず、列島に先住民はいてはならなかった。柳田はしだいに自分の民俗学を人類学から遠ざけていった。

7) 農耕起源論の再考

常木晃編(1999)は食料生産社会の考古学で農耕の起源について整理し、西アジアから中国までを論考している。確かに西アジアについては膨大な調査研究があり、考古資料も豊富である。日本列島においても、新旧問わず、相当の考古学、人類学、民俗学などの研究資料が蓄積されているので、東アジアでの農耕の起源も改めて考えられる条件がそろってきたのだ。10名の著者による興味深い論考が終章でよくまとめられているので、次に摘要する。

(常木晃)栽培や農耕という用語の整理をして、農耕発生プロセスに関する考古学的なモデルをまとめた。栽培は付随的栽培 *incidental domestication*、専門的栽培 *specialized domestication*、農耕的栽培 *agricultural domestication* の3段階がある。農耕発生モデルは年代順に、近接モデル、ストレスモデル、進化論モデル、社会要因モデルを示したが、一般モデルは存在しない状況であると総括した。世界各地の一次的農耕起源地に共通してみられる特徴を整理し、農耕は広範囲生業が可能な自然環境、高度に発達した複合的狩猟採集民社会、人間にとって利用上魅力的な野生植物の3点がそろった場所で発生したことを論じた。農耕という営みの本質は多様な動植物利用から、生産性の高い限定された動植物種に依存するというモノカルチャー化にある。一時的農耕起源地で

共通してみられる特徴を整理する。①広範囲生業が可能な自然環境がある場所、専門的栽培は広範囲生業の補助的食糧獲得法の一つに過ぎなかった。②農耕は豊かな資源に囲まれたより複合的な狩猟採集社会から出現した。定住社会は農耕出現の前提である。③専門的栽培から農耕へと転化した主要作物は主として穀物とマメ類などの種子植物であった。これらの植物は栽培化される以前から食糧源として重要な役割を果たし、野生種の収穫や調理技術を発達させていた。モノカルチャー化した生活の始まりが、生産の偏りを生み出し、生産や流通の専門化や交易の発達を促し、都市社会の形成へと突っ走った。

考古学的調査の進展により、植物地理学的に主張されてきた稲作農耕のいわゆる雲南・アッサム起源説はまったく塗り替えられてしまい、考古学的には過去のものになった。黄河流域の華北に展開した雑穀農耕文化の重要性は依然として不変である。華北の農耕社会の最古の確実な例は紀元前7000年頃の磁山・裴李崗文化であり、アワ・キビの栽培に基づく畑作農耕が行われていた。東アジアでは各地に共通して農耕出現以前に土器が出現する。イネが華北に導入されてからも、華北では水田稲作が主流となるわけではなく、イネは雑穀農耕の一種として取り込まれた。

華北では、仰韶文化後期から龍山文化にかけて城塞集落と階層的墓葬が現れ、ムギ栽培が始まり、多角的雑穀農耕の一翼を担った。縄文的栽培技術、森林を切り開き、起耕し、植物を栽培する管理技術が畑作農耕の受容を容易にした。この後・晩期農耕は縄文時代の基本的生業である狩猟採集経済やそれに基づく精神文化を大きく変容させるほどの生産力は有しなかった。農耕の存在は縄文時代にすでに確固として認められ、水田稲作もはじめは畑作農耕を含む縄文的生業形態の中に付加された。弥生時代の水田農耕への急激な転換の背景には政治的側面が強く働いた。日本列島の本格的な水田稲作受容は、縄文農耕で培われた土着的農耕技術という十分条件と、革新的な灌漑水稲作という必要条件が出会った時に起こった。

人口増大や都市の形成という社会的変化が生じたからこそ、それに対応するために社会的・政治的に農耕の発達を促されてきた。したがって、農耕は社会的・政治的に人間によって生み出され育まれてきた生業技術であり、極めて政治的な所産である。

これまでに引用してきた日本の考古学、民俗学および民族学の所論には、生きている植物の側の視点が少ない。栽培化あるいは家畜化は人間による生殖の管理だというのが、植物（動物）の場合には、常に管理から逃れる、あるいは管理を利用する、人間の意図とは異なる生活史戦略がある。

サトイモ、ナガイモ、ジャガイモ、サツマイモなど主な芋類は一般に種子によらず、イモによる栄養繁殖で栽培されている。大方のサトイモは3倍体で種子はできない。現在進行形で栽培化過程を観察できる植物の生活史から見ると、人間は意図して選抜し、採集するか、さらに集落や採集経路に移植栽培するかを行ったのだろう。生殖の管理が栽培化ということは栽培化過程の野性的な初期には当たらない。イネは湿生多年生草本であるから、これを生態的に一年生化することが栽培化過程で重要だった。つまり、前年に収穫した種子を翌年播種することで選択し、年間の生育サイクルを繰り返して、一年生化に向かわせた。一年生草本は自殖率が高く、種子に光合成産物を集積するので、食料には適している。陸稲は栽培化過程で、より乾燥した地域伝播する過程で生じた品種群である。インドでは今日でも、湿地に生育しているイネの多年生祖先種の種子が採集されて祭事に神々に供されている。また、古来、米は加工精白した穀粒を言い、イネに限定して使用されるのではなく、本来はイネの植物和名ではない。米はイネの現在の通称であり、植物和名はイネである。また、世間が生業を職業と広義に通称するのは、言語は生きているので構わない。

しかし、学問的には厳密に定義した用語法で論考してほしい。生業は家族が生きるために自由意思によって行うもので、租税や商品生産を強要されて行う産業とは異なる。定義が曖昧であると、論理が一貫せず、誤解を生む。

民俗学や考古学の研究者の多くが、生きた植物の生活史そのものに関心をもたずして、植物学をも蔑ろに農耕の起源を論じていることにも大きな課題がある。植物学専攻の私は考古学や民族学の書籍や文献を読んで、栽培植物の現代と遠い過去をつなぐよう試みてきた。しかしながら、考古学や民族学の研究者は進化生物学の調査研究からの現在進行形の栽培化過程の研究成果に何ら興味や関心を示していない。第四紀更新世 258 万年、約 200 万年前に人類ホモ・ハビリスが出現し、ホモ・サピエンスは約 10 万年前、ごく最近に過ぎないたった 1 万年余りの先史時代以前に、とても長い歴史的時間をかけて無数ともいえる植物の進化は多様に展開していたし、今でも進化は続いているのだ。

おわりに

補論 3 で課題にした 3 点についての考察がどこまで到達したのかをまとめる。①サバンナ農耕文化基本複合の指標作物としてのシコクビエの伝播、②アワとイネの伝播とこの 2 栽培種の同伴事象。③稲作単一民族説を柳田国男はなぜ敗戦後になって提起したのか。

最近の考古学分野で、ヒエ、エゴマなどの他、ダイズやアズキも日本列島で縄文時代に栽培化が進んできたことが高い精度で明らかになり、中尾の仮説である、サバンナ農耕文化が照葉樹林文化を通して縄文時代に受容されたという内容については、オオムギなども含めてさらに再検討が必要である。指標植物としてのシコクビエに関しては遺跡からの出土事例がごく少なく、今しばらくシコクビエの伝播の様態は明確にできない。現在まで、生きた文化財として継承されてきたシコクビエの栽培が風前の灯になっている現実にも、関心を向けていただきたい。

アワとイネの同伴事象が長らく気になっていた。天皇家では今でもアワとイネを皇居で栽培し、各地の農家にアワの献納を求めて、新嘗祭に供している。言語学の大野晋のタミル語説によればタミルと日本の古語に類語が多くみられるのだが、中でもイネとアワに関する農耕用語が多くある。しかし、これほど丹念な仕事であるのにおおかたの考古学者は一顧だにしない。北部九州の佐賀県菜畑遺跡などでは水田稲作とアワ畑作が共存していた。

遠藤英子（2015 博士論文）は雑穀栽培も弥生農耕に含まれ、弥生文化の一部であるという立場には賛同できないが、雑穀栽培を縄文後・晩期農耕として弥生農耕と区分できないという見解には賛同する。遠藤は次のように結論づけている。

これまで蓄積されてきたレプリカ法データや今回の一連の調査結果からは、縄文文化以来の根拠となる考古資料は縄文晩期末突帯文期以降を例外に現状では存在しておらず、アワ・キビの雑穀もまたイネと同じく突帯文期に朝鮮半島経由で日本列島に伝播した大陸系穀物にルーツを持つものと筆者は捉えている。畑作技術を含む多様な生業が組み合わせられる縄文文化の証拠は今のところ見つかっていないので、稲作文化 v s 畑作文化といった対立的構図は成り立ちえない。朝鮮半島南部で展開していたイネと雑穀の複合的栽培が縄文時代晩期に伝播し、それが各地で多様な展開を見せたとするのが本論からの結論である。雑穀栽培も弥生農耕に含まれ、弥生文化の一部である。

遠藤が上述のように断定するように弥生時代がすべてであり、弥生を縄文と厳格に区分するというのは考古学者の呪縛であって、人間は続けて境界を越えてくるし、時間差は常にある。一方で、植物は人間の意に全面的に従いはしていない。小畑弘己・國木田大（2022）

は、福岡県江辻遺跡の土器からイネ、アワ、シソなどの種実を多数検出、微量炭素年代測定法により、 2763 ± 36 14CBP \sim 2730 ± 43 14CBP、弥生時代早期の山の寺・夜臼 I 式土器より 50 \sim 80 年ほど古く、縄文時代晩期後半に北部九州の縄文人たちが小規模栽培を行っていたと考えた。この縄文と弥生の重なり合った頃にアワとイネが相伴って伝播したことはあったのだろう。

第 3 章や補論 2 で述べたように、コムギの輸入の増大はパン食、脱脂粉乳の普及を学校給食で推進したアメリカの食料戦略であったのだろう。柳田の稲作単一民族説は、他方で結果として、稲作を単一重視に向かわせ、過剰生産に陥り減反政策に向かわせた。減反政策はイネを作らないことに補助金を出したので、農民の働く誇りを著しく損ねた。現在は、パン食が米食を逆転するまでに日本の食生活が変容して、イネの主食としての地位が低下してきた。

どうしても日本の学界は単眼的、閉鎖的で、特定分野の専門性に沈潜して、他分野への好奇心を持たず、統合的に学問を展開しない。中尾佐助や佐々木高明のようにフィールド・ワークを重ねて、多くの分野に好奇心を持ち、直観的に大きな仮説を構想できない。つまりは研究費獲得のために流行の課題に誘導され、集中して追い求めるあまり、独創的な研究が困難であり、また独創的な研究は評価されないのだろう。

野生社会、前農耕社会、農耕社会、農業社会、産業社会、情報社会へと、歴史的に社会の様態が推移してきた中で、縄文文化から継承されてきた伝統的知識体系を深く学び、将来に希望をつなぐ展望を探さねばならないと考えている。

引用文献

Bellwood, P. and C. Renfrew (ed.). 2002. Examining the farming/language dispersal hypothesis. University of Cambridge, Cambridge.

安孫子昭二 2002、あとがき、浅川利一・安孫子昭二編、縄文時代の渡来文化一刻紋付有孔石斧とその周辺、雄山閣、東京。

安孫子昭二 2015、東京の縄文学—地形と遺跡をめぐって、之潮、東京。

遠藤英子 2015、栽培穀物から見た、日本列島における農耕開始期の様相、東京都立大学博士論文。

藤森栄一 1970、縄文農耕、学生社、東京。

藤尾慎一郎 1993、生業から見た縄文から弥生、国立歴史民俗博物館研究報告第 48 号：1-66、千葉。

藤尾慎一郎 2022、土器と DNA—伊勢湾沿岸地域における水田稲作民と採集・狩猟民、科学第 92 号第 2 巻：125-132。

藤原清貴編 2018、歴史 REAL 日本人の起源、洋泉社、東京。

Fuller, D.Q., R. Korisettar and P.C.Venkatasubbaiah 2001, Southern Neolithic cultivation systems: A reconstruction based on achaeobotanical evidence. South Asian Studies 17: 171-187

畠山剛 1997、縄文人の末裔たち—ヒエと木の実の生活史、彩流社、東京。

平野哲也 2019、江戸時代北関東における食と農、一下野国の主穀の生産・流通・消費を事例に一、農業史研究第 53 号：ページ記載なし。

神澤秀明 2022、朝鮮半島にも残る「縄文遺伝子」—古代ゲノム研究から見た朝鮮半島の古代人、科学第 92 号第 2 巻：138-143。

- 笠原安夫 1984e、横浜市道高速 2 号線 No. 6 遺跡住居址出土炭化種子の同定、横浜市道高速 2 号線埋蔵文化財発掘調査報告書 No. 6 遺跡 IV : 56-67、pls. 26-30、横浜市道高速 2 号線埋蔵文化財発掘調査団、神奈川県。
- 木俣美樹男 1991、第五章インドにおける雑穀の食文化、阪本寧男編、インド亜大陸の雑穀農牧文化、学会出版センター、東京。
- Kimata, M. 2016, Domestication process and linguistic differentiation of millets in the Indian subcontinent, Ethnobotanical Notes No.9 : 12-24.
- 木俣美樹男 2022、第四紀植物、植物と人々の博物館、山梨。
<http://www.milletimplic.net/weedlife/quatlplants/quatlplantsfinal.html>
- 岸田定雄 1993、奥吉野の稗作、雑穀研究 3 : 1-4。
- 小林達雄 1999、縄文人の文化力、新書館、東京。
- 小山修三 1990、縄文探検、くもん出版、東京。
- 松谷暁子 2001、灰像と炭化像による先史時代の利用植物の探求、植生史研究第 10 巻第 2 号 : 47-65。
- 水野祐・松尾光ら 1998、日本古代史と遺跡の謎・総解説、自由国民社、東京。
- ミズン Mithen, S., 1996、松浦俊輔・牧野美佐緒訳 1998、心の先史時代、青土社、東京。
The Prehistory of the Mind A search for the origins of art, religion and science, Thames and Hudson Ltd., London, UK.
- 中尾佐助 1966、栽培植物と農耕の起源、岩波書店、東京。
- 中尾佐助 1967、XII 農業起原論、自然～生態学的研究、PP. 329-494、中央公論社、東京。
- 中尾佐助・佐々木高明 1975、縄文的自然から弥生的自然へ—照葉樹文化論、『知の考古学』第四号 : 2-20、社会思想社、東京。
- 中山誠二 2010、植物考古学と日本の農耕の起源、同成社、東京。
- 西田正規 1989、縄文の生態史観、東京大学出版会、東京。
- 那須浩郎 2014、稲作の起源とその広がり、工藤雄一郎・国立歴史民俗博物館編、ここまでわかった！縄文人の植物利用 pp. 186-205、新泉社、東京。
- 小田静夫 2017、考古学から見た新・海上の道、南島考古 No. 36: 21-34。
- 小畑弘己 2016、圧痕法が明かす縄文人の食と心、ユリイカ第 49 巻第 6 号 : 94-104。
- 小畑弘己 2016、タネをまく縄文人～最新科学が覆す農耕の起源、吉川弘文館、東京。
- 小熊英二 1995、単一民族神話の起源—<日本人>の自画像の系譜、新曜社、東京。
- 大野晋 2000、日本語の形成、岩波書店、東京。
- 大野晋 2004、弥生文明と南インド、岩波書店、東京。
- 斎藤信也 2017、核 DNA 解析でたどる日本人の源流、河出書房新社、東京。
- 斎藤信也 2022、埴原和男の二重構造モデル、論文発表から 30 年、科学第 92 号第 2 巻 : 150-153。
- 佐々木高明 1971、稲作以前、日本放送出版協会、東京。
- 佐々木高明 2001、縄文文化と日本人、講談社、東京。
- 佐々木高明 2003、南からの日本文化（上）—新海上の道、日本放送出版協会、東京。
- 佐藤省三 1998、日本のシコクビエ、雑穀研究 11 : 1-8。
- 佐藤省三 2001、続・日本のシコクビエ、雑穀研究 11 : 14-19。
- 佐藤洋一郎 2017、縄文農耕論の今、ユリイカ第 49 巻第 6 号 : 62-70。

篠田謙一 2022、弥生人とは誰なのか—古代ゲノム解析で判明した遺伝的な多様性、科学第 92 号第 2 巻：132-137。

スコット, J. C. 2017、立木勝 2019、反穀物の人類史—国家誕生のディープヒストリー、みすず書房、東京。Against the Grain: A Deep History of the Earliest States, Yale University Press.

橘礼吉 1994、白山麓のコウボウビエ、雑穀研究 5：1-5。

橘礼吉 1996、シコクビエを八石稗とよんでいた山陰海岸部の資料、雑穀研究 9：1-3。

丹信実 1964、紫雲出山貝層の自然遺物。

谷川健一 2014、柳田民俗学存疑—稲作一元論批判、富山房インターナショナル、東京。

戸沢充則 1994、縄文農耕、加藤晋平・小林達雄・藤本強編集、縄文文化の研究 2 生業 pp. 254-266、雄山閣出版株式会社、東京。

坪井洋文 1979、イモと日本人—民俗文化論の課題、未来社、東京。

常木晃編 1999、食料生産社会の考古学、朝倉書店、東京。

Xuehui Huang et al. 2012, A map of rice genome variation reveals the origin of cultivated rice, Nature 490:497-501.

参考文献

課題に関係する文献は多いが、詳細に論考するには補論が長くなりすぎるので、参考文献として下記に掲げておく。

クリスタル, D.、斎藤兆史・三谷裕美訳 (2004)、消滅する言語—人類の知的遺産をいかに守るか、中央公論社、東京。David Crystal 2000, Language Death, Cambridge University Press.

加藤晋平 1988、日本人はどこから来たか—東アジアの旧石器文化、岩浪書店、東京。

国分直一 1992、北の道南の道—日本文化と海上の道、第一書房、東京。

国分直一 1992、日本文化の古層—列島の地理的位相と民族文化、第一書房、東京。

前田保夫 1980、縄文の海と森—完新世前期の自然史、蒼樹書房、東京。

溝口優司 2020、アフリカで誕生した人類が日本人になるまで、SB クリエイティブ、東京。

中尾佐助 1978、現代文明ふたつの源流、朝日新聞社、東京。

小倉紀蔵 2020、群島の文明と大陸の文明、PHP 研究所、東京。

大野晋 1974、日本語をさかのぼる、岩浪書店、東京。

大野晋 1978、日本語の文法を考える、岩浪書店、東京。

大野晋 1994、日本語の起源、岩浪書店、東京。

崎谷満 2008、DNA でたどる日本人 10 万年の旅—多様なヒト・言語・文化はどこから来たのか？、昭和堂、京都。

佐々木高明編 1983、日本農耕文化の源流—日本文化の源像を求めて、日本放送出版協会、東京。

佐々木高明 2003、南からの日本文化（下）—南島農耕の探求、日本放送出版協会、東京。

佐々木高明 2013、日本文化の源流を探る、海青社、大津。

佐々木高明・松山利夫 1988、畑作文化の誕生—縄文農耕論へのアプローチ、日本放送出版協会、東京。

佐原真・都出比呂志編 2000、環境と食料生産、小学館、東京。

島根県埋蔵文化財センター1998、頓原町板屋 III 遺跡。

篠田謙一 2019、日本人になった祖先たち、DNA が解明する多元的構造、NHK 出版、東京。

東京都教育委員会 1993、東京の遺跡散歩、東京都教育庁生涯学習部文化課。

安田喜憲 1980、環境考古学事始—日本列島 2 万年、日本放送出版協会、東京。

山村農人降矢静夫関連文集成、植物と人々の博物館。

www.milletimplic.net/milletsworld/millet/sn/furuyaall.html

Wikipedia2022 参照、シコクビエ。